

中国鉄道の車内風景

● 放眼日中



昨年末、実に久しぶりに中国を鉄道で旅してみた。雲南省昆明から湖南省長沙までは、乗車時間約20時間。

29年前の上海留学中に、上海から昆明まで66時間、3泊4日をかけて列車に乗ったことがとても懐かしき思い出されたが、この間の中国の変化は、車内の色々なところに出てきて面白かった。

硬臥と呼ばれる2等寝台に乗ったのはその時以来だが、29年前は皆が暇を持て余し、珍しい外国人である我々の所へやって来て「テレビで東京の街を見たが、本当にあんなに発展しているのか？」とか、「松下の電気製品は素晴らしい！」など、自分の知る日本の話題を次々に持ち込んでくるのでかなり疲れたのをよく覚えている。

だが、今回は我々が日本人だと言っても「あ、そうなの」といった対

応で、特に長話をする人など殆どいなかった。

当時、友人同士や家族で乗り込んでくる中国人の中には、大声でしゃべる人がおり、トランプなどで白熱するとかなりうるさかったが、今回は車内がひっそりしているのに驚いた。多くの人は日本と同様、スマホにくぎ付け、またはiPadで好きな映画を見るなど、思い思いの列車の旅を送っているのが印象的だった。一番大きな変化と言えば、中国人の体形ではなからうか。硬臥は3段ベッドだが、その狭いベッドからはみ出して寝ている男性が何人もおり、その人々に共通していたのは、すごい軀からだをかくことだった。30年前の中国人は痩せている人が多かったが、あれは決してウーロン茶を飲んでいなかったのではなく、食べ物不足していたからだだったのだ。

経済成長の結果、人間の体も大いに成長してしまい、今や、成長が膨張になってしまったということだろうか。

長沙から三国志で有名な赤壁という街までは、硬座と呼ばれる2等座席にも乗ってみた。この硬座も指定席なのだが、無座という席なしの切符が売られるので、立っている人がたくさんいた。

そんな中、若い女性2人が大量の荷物を車内に持ち込み、他の乗客の言うことも聞かずに、その荷物を網棚に上げもせず、座席と通路に置いていた。かなりの不評を買っていたが、全く意に介さない態度はすごい。昔ならその辺のおじさんが「何やってんだ！邪魔だろう」などと言って、荷物を網棚に載せたであろうに。今や、個人の意思が尊重される時代になったのか。



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

また、途中駅で筆者の横の席の切符を持ったおじさんが現れたが、そこには既に、おじさんが座っていた。どうするのかと見ていると、何とおじいさんは体をちよつと横に向けて僅かなスペースをつくり、そこへ座れと指示する。おじいさんは自分の席にもかかわらず、おじいさんを退かすことなく、何とそこへ滑り込む。3人掛けの席に4人が座り、相当窮屈な時間が続いたが、誰も文句を言わなかった。何であつても、老人に対する接し方は昔から変わらないな、と思える場面だった。

武漢から太原まで高速鉄道にも乗ってみたが、この車内はもう日本とそう変わらなかつた。ただ、違うところがあるとするれば、日本の新幹線にはない無料のお湯が供給され、多くの人がカップ麺を啜すすっていた。中国は本当にせわしなくなつた。